外国人として生きる

蕙質蘭心（フェツランシン）
―蘭のよき香りを日本で。台湾から嫁いで四半世紀

山口 隆子（やまぐち たかこ）
神戸大学大学院総合人間科学研究科

子どもたちの学習支援

「クラブ活動より学校の勉強の方が大事だよ。さぼらないで。この字は何と読むの？…そう正解。そしたらこれは？」

窓の外から奈良公園に向かう行楽客の賑やかな声が、この奈良市三条通りに面する公民館の一室にまで聞こえてくる。ここでは、宿題と格闘する子どもたちへの王蕙懿（ワンフェイ）さんの元気のよい声が響く。

毎週日曜日の午前中、外国人家族とその子どもたちがいちばん困っている学校での勉強や宿題をサポートする教室がもたれて一〇年が過ぎる。子どもたちのほとんどが奈良市周辺に住んでいる。彼女に叱咤激励されていた中学一年生の女の子は、中国からやってきた。午後からの友達と遊びに行く約束で落ち着かず、目の前の宿題に気もそぞろだ。「クラブの友達とのつきあいも大切やねん」とできない宿題を前に、訴えるように困った顔をわたしに向ける。やがて子どもたちが一通り課題の宿題を終えたとき、おやつの菓子が配られる。そこにはさっきとは違う、優しい顔の王さんがいた。

めぐりめぐった縁で日本へ

王さんは台湾出身である。来日前、彼女は台北市内からバスで一時間のところにある巴峻（バリュイン）で、国民小学校の代理教師を一〇年以上してきた。子どもが大好きな彼女は、彼らが生きていくためには知識こそ不可欠であることをそのときの経験から学んだ。だからこそ、異国にあって苦労する子どもの勉強に関しては特に熱心で、常日頃うるさく言っている。特に日本語の力をきちんと身につけておくことがすべての出発点となるのはいうまでもない。

彼女が来日したのは一九八四年九月二五日である。理由はお見合い結婚をした相手が「日本人だったから」である。お見合いのきっかけは、「わたしの大学の同級生の、その同僚のお父さんの、日本人の友達の奥さんの兄が夫となる人だった」と、めぐりめぐったパズルのような縁を、ついこのあいだのことのように鮮明に、とても愉快に話す。ちなみに「大学の同級生の同僚のお父さん」という人は、日本の台湾統治時代に広島で六年間暮らした経験をもつらしい。

日本に関してほとんど知らなかった彼女は、来日して二年目、家族旅行で温泉に行った。入浴方法も知らないまま、タオルももたずに大浴場に行き、そこで目の前の石鹸を直接体につけて洗った。そのとき、その場にいた家族のひとりが、「やっぱり外人」と言った一言が、今でも悔しいと言う。来日当初から一生懸命、少しでも早く日本の生活に慣れるよう努力したにもかかわらず、たった一度の行動をとらえて「外人」と言われたことに、言いようもない疎外感を味わったのだ。今では「日常生活では、外国人として生きているという意識は薄い」と彼女は言う。彼女にとっては、外国人であることを意識するより、どのような環境にあっても、毎日、人間としてどういう目標や希望をもって生きていくかということの方が大切だからだ。

医療通訳介助から身の上相談まで

この王さんも、来日するまで日本語がまったく話せなかった。しかし、その後、努力を重ねて、日本語検定試験の一級に合格する。これが、奈良県での中国人のための自立指導員や民間通訳として活躍をする基礎となった。日本語が使えず日本の文化を知らないことで、自分も経験してきたさまざまな悩みをもつ人びとの相談にのってきた。また、真夜中でも中国人の急患の連絡があると駆けつけ、病院側と患者のあいだにたって二四時間態勢で通訳をおこなう仲介人としても活躍してきた。これらの活動で彼女は「多年にわたる功労・日本財団賞」を受賞している。

述べてきたような公的支援活動の枠外でも、日本人と結婚して経済的に満足している外国人女性に、貯金や就業で生活を防衛する処世術を助言するなど、外国人の自立を目標とする立場はわすれない。この点が外国人の子どもたちの学習支援もつながっているといえる。

来日して二三年が過ぎた。最近の彼女には、夫が昨年末に脳の疾病で突然入院したために、介護というあらたな役割が加わった。考えてみれば長い年月が流れたあいだに、夫や義理の両親の高齢化や介護という現実問題に突き当たるのは、外国人とて当然のことかもしれない。それでも、昨年は台湾で、一ヵ月一〇〇時間の研修に挑戦し、台湾の「導遊人員執業證」と「領隊人員執業證」を受験して見事に合格した。個人ツアーと団体ツアーの添乗員の、台湾の国家資格である。さらに、彼女は二〇一〇年までに、日本の通訳案内士国家試験に合格するという次の夢をもっている。

王蕙懿さんの名前の由来は、蕙質蘭心といって、蘭の一種である蕙からとり、蘭のように美しい心を持つ清々しい女性になって欲しいと両親が願いを込めてつけた。台湾の標高一〇〇〇メートルの山の上で育つこの蕙は、とても芳しい香りがするのだ。今、王さんは子どもたちと朗らかに、そして前向きに、一緒にいる人びとをしあわせにする香りを放ちながら、この社会に暮らしているようにわたしは思える。

23年前の結婚式当日。
台湾では天公という神様がいちばん偉いが、
嫁ぐ日の花嫁もいちばん偉い。
その二人が出会わないように傘でさえぎるのだという

代理教師の試験を受けた時に使った受験票。
大学の制服を着た王さん

「世界の女性とティータイム」の講座で
女性たちとの交流を楽しむ

大好きな子どもたちに、
中国のことを話して、中国ゴマで
一緒に遊ぶ王さん